

熱帯疎林の再生をめざして

養蚕の復興活動を通して、「伝統の森」熱帯疎林の再生の必要性を痛感しています。



森本喜久男（クメール伝統織物研究所・代表）

桑の木基金が支援するカンボジアの村興しのプロジェクトを現地で進めるクメール伝統織物研究所の森本さんから、伝統織物の復興のためには、桑の木を育てること

との大切さとともに、草木染めに必要なさまざまな材料を育てくれる熱帯疎林の再生も必要だという提案が届きました。森本さんの声をお届けします。

熱帯モンスーンに位置するカンボジア。そのなかでも、アンコールの遺跡群で知られるシエムリアップ。この著名なアンコール遺跡群の後背にはクレーン山と呼ばれる、山並みがひかえている。その山並みにも多くの遺跡が残されている。数百年にわたるアンコール王朝を生み出してきた、シエムリアップの自然とクメールの精神世界。そして、この山並みは熱帯モンスーンの代表的な自然林。しかし、残念ながらその豊かな自然は、伐採により危機にさらされている。

要とする。しかし、戦乱の中で、そんな自然環境も壊されてきた。

1970年にはじまる内戦は、カンボジアの伝統的な社会や文化に深い傷跡を残してきた。そして、ここ数年ようやく平和が訪れた村々。しかし、伝統的な稲作社会を背景に育まれてきた文化は容易に回復することはできない。

クメール伝統織物研究所では、伝統的なこのラックカイガラ虫の生育に必要な自然の森の復元を、シエムリアップで取り組もうとしている。森は村の人々の伝統的な生活を支えてきた自然環境の中心。そんな、小さな森の再生。シエムリアップ伝統の森再生計画。あわせ、天然染料素材となる植物や樹木、果実の栽培も平行して進めていく計画。小さな自然染色植物園。これは、人とともに生きる森の創造でもある。研究所はこれまでの伝統織物の復元と調査の活動の中で、伝統は常に自然と共にあったことをあらためて教えられてきた。豊かな伝統は、豊かな自然があって始めて成立する。熱帯モンスーンのなかの自然林と稲作がこの地域の人々の生活と文化を大きく支えてきた。

クメール伝統織物研究所が復元と活性化に取り組んできた絹織物も、カンボジアを代表する伝統文化のひとつ。戦乱以前には、村では綿花が栽培され、生糸を生産するために養蚕もおこなわれてきた。織りの素材となる糸から、藍やラックなどの自然染色の植物、そして必要な道具を作り出す木々など、そのすべてが村の中でまかなえるシステムが出来上がっていた。

「伝統の森」と隣接した地域に、綿花や桑畑、そして織りや染を中心に、伝統的な竹細工や木工、焼き物など、村に伝わってきたカンボジアの伝統工芸を再現する小さな村を併設。それは、失われつつある熱帯モンスーンの森と共に生きる伝統工芸の姿を、次の世代に伝えてゆくためでもある。そのプロジェクトの名称は「伝統の森計画」。当初5カ年を予定。種から植えた苗木が育ち、ラックカイガラ虫が成育可能な森が出来上がるまで。

その中でも、カンボジア緋の布の特徴でもある赤色染料として使われてきたラックカイガラ虫の巣は、アンコールの時代から受けつがれてきた生活の智慧。ラックは古くから森の幸として取引され、フランスの植民地時代にはヨーロッパに向け輸出されていた。しかし、戦乱の中で壊滅、現在ではカンボジア国内では手に入らなくなってしまった。ラックカイガラ虫が生活温度を維持、成育するためには小規模ながらも森を必

クメール伝統織物研究所では、これまで「桑の木基金」により村での養蚕の再開に取り組んできた。その経験をこの「伝統の森計画」に活かしてゆければと考えている。皆さまのあたたかいご支援とご協力をここにお願い申し上げます。